主に前庭症状を示した耳帯状疱疹の1症例

—Haymann IV型の耳帯状疱疹症例—

水田 康雄*・大島 渉**・西村 秀夫**・橋 正芳**

A Case of Herpes Zoster Oticus in Which Vestibular Dysfunction was the Main Symptom

Yasuo Mizuta

(Aiseikai Yamashina Hospital)

Wataru Oshima, Hideo Nishimura and Masayoshi Tachibana

(Kyoto Prefectural University of Medicine)

In this case of herpes zoster oticus without facial palsy vestibular dysfunction was the main symptom.

A 76-year-old female complained of severe vertigo with the onset of herpes zoster oticus. Spontaneous horizontal and circular nystagmus to the left, sensorineural hearing loss on the right and canal paresis on the right were detected. There were no other neurological symptoms.

These symptoms and findings suggested that this patient had a varicella-zoster virus infection of her outer germinal layer tissue of the skin and sensory epithelium of the inner ear.

Key words: herpes zoster oticus, vestibular dysfunction, facial palsy, varicella zoster virus, outer germinal layer

はじめに

耳帯状疱疹は日常臨床において稀ならず経験され、その多くが顔面神経麻痺・第8脳神経障害を伴ういわゆる完全型 Ramsay Hunt 症候群の臨床像を示している。又第8脳神経障害や耳帯状疱疹を欠く不全型 Ramsay Hunt 症候群も広く存在する。しかし、顔面神経麻痺を欠き第8脳神経症状を主に示す耳帯状疱疹は極めて稀である。今回我々は、耳帯状疱疹出現と同

時にめまいをきたした Haymann のIV型の1症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

症例： 76歳 女性。

初診：昭和60年2月25日

主訴：右耳痛、めまい

家族歴：姉が直腸癌、妹が喘息

既往歴：慢性胃炎、高血圧のため内科医にて

*愛生会山科病院耳鼻咽喉科

**京都府立医科大学耳鼻咽喉科学教室

内服加療中である。

現病歴：昭和60年2月14日頃より，右耳鳴，右耳閉感，右側頭部痛が生じてきたので近内科医を受診し，感冒の診断下に内服加療してい

た。同月21日より，さらに右耳痛，右耳介から右外耳道入口部にかけての小水泡群，回転性のめまいが生じてきたため，当科を紹介され受診し直ちに入院となった。

図1 右耳介部の疱疹群と右鼓膜の血痂皮

VESTIBULAR EXAMINATION

(S60.2.25)

図2

入院時所見，現症：右耳介の耳甲介腔部から外耳道入口部の皮膚にかけて発赤腫脹と共に水泡群が認められ，一部融合し，一部自潰していた。又，右鼓膜の中央部に血痂皮が付着していた（図1）。顔面神経麻痺は見られなかったが，右流涙が著明に見られた。その他左耳，鼻腔，咽喉頭には特に異常を認めず，一般神経学的所見としては，第Ⅷ脳神経系以外は特記すべきものはなかった。

激しい回転性のめまいを訴えていたため眼振検査を施行したところ，下方視注視下およびフレンツェル眼鏡下・頭位眼振検査において，健側向き（左向き）の水平回旋混合性の眼振が見られた（図2）。

純音聴力検査では，右感音難聴，左混合難聴をみとめた（図3）。

顔面神経麻痺はみられないものの右流涙が著明にみられるため，アブミ骨筋反射検査，電気味覚検査を施行したが，左右差はなく，正常域内であった。

以上の諸成績から，不全型 Ramsay Hunt

症候群と診断した。なお，血液生化学検査・尿検査においては特に異常所見を認めなかった。ウイルス抗体価は varicella-zoster 32倍，herpes-simplex 16倍であった。

臨床経過：入院前後の症状・検査所見などの経過を図4にまとめた。経過を通じて顔面神経麻痺を欠く不全型 Ramsay Hunt 症候群は極めて稀であるので，顔面神経麻痺の出現の可能

図3

臨床経過

(76才，♀)

図4

性を念頭におきつつ治療を開始した。2月25日の入院直後より、グロベニン 2500mg/日を4日間連日投与、プレドニンを40mg/日から漸減投与、その他抗めまい剤やATP製剤を投与した。治療開始1日後には、右耳鳴、右耳痛、右側頭部痛の自覚症状のほぼ消失を見、めまいや右流涙も漸次改善した。グロベニンの投与も終

了した入院5日目に平衡機能検査を施行した。

図5に示したごとく、注視下でも非注視下でも左回旋性眼振が見られたが、初診時より眼振の頻度は減少していた。足踏み検査はふらつきが強いと不可能であり、立ち直り反射もかなり障害されていた。20℃、20mlおよび0℃、20ml注水による温度眼振反応は、右耳 no res-

VESTIBULAR EXAMINATION

(s. 60 3. |)

	eyes open	eyes closed
bipedic standing	stable	unstable
monopedic standing	R	L
Mann's test	Unstable	Unstable

Caloric Test (20) °C

Caloric Test (0) °C

maximum speed of slow phase

r-ear */sec

l-ear */sec

図5

ponse であり右耳 canal paresis を認めた。その後耳介の水泡や発赤腫脹なども快方に向かい、入院後16日目には耳介の水泡の消失を見、めまいや平衡障害も入院後24日目にはほぼ改善し、注視下、非注視下でも全く眼振は見られず、立ち直り検査においても Mann's test の閉眼時にのみふらつきをみとめる程度に回復していた。また、純音聴力検査では、右耳の感音難聴の改善をみとめた(図6)。よって、3月21日に退院となったが、経過を通して顔面神経麻痺は生じなかった。また、varicella-zoster ウイルス抗体価は、入院後14日目において32倍と初診時と変化を見なかったが、発症から7週間後には8倍に低下をみた。なお、発症から約7カ月後に再度温度眼振反応を施行したが、右耳は依然 canal paresis をしめしていた。

考 案

Ramsay Hunt 症候群は耳帯状疱疹、顔面神経麻痺、第8脳神経症状を3主徴とする varicella-zoster ウイルス感染疾患として知られている。また多くの種類の不全型が存在し、第8脳神経症状を欠くものや耳帯状疱疹を欠くものもある。しかし、我々の症例のごとく、耳帯状疱疹と第8脳神経症状を主体とし、顔面神経麻痺を欠くものは稀である。本症例は右流涙を認めるが、あぶみ筋反射正常・味覚正常であり、右流涙は三叉神経知覚枝の刺激症状と考え

られる。Haymann ら¹⁾は耳帯状疱疹を表1のごとく分類しているが、本症例はこの Haymann IV型に相当する。この Haymann IV型の耳帯状疱疹(耳帯状疱疹と第8脳神経症状を認めるが顔面神経麻痺を欠く不全型 Ramsay Hunt 症候群)は、本邦においては表2のように19例が文献上認められるが^{2)~9)} 詳細な症例として報告されているのは7例にすぎない。Ramsay Hunt 症候群の病変の拡がり方を検討するため本症例を含めた8症例についてみてみた。Varicella-zoster virus (VZV) は水痘感染のさい知覚神経後根神経節に潜伏し、宿主側の条件によって再活性化し、皮膚知覚領域へ伝播するとされている¹⁰⁾。しかし、これまでに知覚神経節からVZVが分離されてはいないという¹⁰⁾。よって、病理学的にVZVの波及様式をみることはできない。臨床症状からVZVの波及のしかたについてこれまでに次のような種々の様式が考えられている。即ち、(1)一つの知覚神経節から神経吻合を介して波及する、(2)同時に複数の知覚神経節が侵される、(3)限局性脳炎、(4)脳脊髄液を介して波及する。種々の症状が同時に出現することが少なく、多くは時間を追って現れることから(1)の神経吻合を介する説が多くの報告者にうけいれられている¹¹⁾。しかし、脳神経の交通枝、連絡枝の吻合は図7のごとくであり、本症例のような顔面神経麻痺を欠く Haymann IV型が稀ではあるものの存在することは、(1)の神経吻合を介しての説では説明

図 6

表1 耳介部帯状水痘ウイルス感染症の分類 (Haymann)

1. Herpes oticus only
2. Herpes oticus with facial palsy
3. Herpes oticus with facial palsy with accompanying auditory and labyrinthine symptoms
4. Herpes oticus without facial palsy with accompanying auditory and/or labyrinthine symptoms

しがたい.むしろ(2)の複数の神経節に潜伏していたVZVが同時に再活性化したものとする説がVZVの波及の様式と理解し易い.

Haymann IV型の予後は,第8脳神経に関しては不良である.表2にみられるように聴力障害は改善がほとんどなく,また温度眼振反応もcanal paresisに留まっている.これは,VZ

Vが基本的に皮膚親和性を有し,皮膚と同じ外胚葉系である内耳感覚上皮を障害しているためと考えられる.

治療は顔面神経麻痺の治療とめまいの治療が基本となる.さらに,ウイルス感染であるためγ-グロブリン製剤の使用,インターフェロンの投与⁶⁾,抗ウイルス剤 Adenin arabino side

表2 耳帯状疱疹 Haymann IV型の症例(本邦, ~1985)

報告者	報告年	年齢	性別	ヘルペス患者耳	眩 量		難聴改善	そ の 他
					自 発 眼 振	カロリックテスト		
高原・他	1938	35	女	左	なし	減 弱		難聴なし
調	1965	26	女	右	健側向水平性(一部垂直)	CP		難聴なし、脳幹障害(?)
大 澤	1972	63	女	左			無	眩量なし IX・X・XI脳神経症状
西村・他	1983	21	女	左	患側向水平性	減 弱	無	脳炎合併(?)
小野・他	1985	57	男	右	健側向水平回旋混合性	CP	無	脳炎合併
杉山・他	1985	44	?	?	健側向水平回旋混合性	CP	無	
		57	?	?	患側向→健側向水平回旋混合性	CP	無	
本症例	1985	76	女	右	健側向水平回旋混合性	CP	有	
調	1965	5例	}	詳細不明				
養和田	1971	1例						
阿 部	1981	6例

図7 第Ⅲ～Ⅹ脳神経の交通枝(文献(11)による)

(Ara-A)の使用¹²⁾の有効性が報告されている。本症例においては、ステロイド剤、 γ -グロブリン製剤などの投与により、臨床症状の早期消失、聴力障害の改善、顔面神経麻痺の予防(?)を得た。

本症例のような不全型 Ramsay Hunt 症候群を詳細に検討し、かつ十分な治療を行い、その上でこのような症例を積み重ねることは、さらに病態を解明する一助になると考えられる。

まとめ

耳帯状疱疹に顔面神経麻痺を伴わず、主としてめまい、平衡障害をきたした Haymann IV型に相当する76歳の女性の症例を報告し、若干の文献的考察を加えた。

めまいの出現時、左側に向かう水平回旋混合性の自発性及び頭位眼振を認めた。平衡機能検査において右側の canal paresis があり、また右耳の感音難聴を認め、その他の神経症状を示さなかったことなどから、VZVの皮膚や内耳感覚上皮といった外胚葉系組織への障害によるものと考えた。

本論文の要旨は第13回日本臨床耳科学会(昭和60年,名古屋)において発表した。

文 献

- 1) Becker A : Die virusbedingten Erkrankungen im Hals-Nasen-Ohrenbereich. Archiv Ohren-nusw u Z Hals-usw Heilk 167 : 153~165,

1955.

- 2) 高原高三, 他 : 前庭神経のみを侵襲せる耳性帯状疱疹症例. 耳鼻臨床 33 : 102~110, 1938.
- 3) 調 重昭 : 主に前庭症状を示す耳帯状疱疹の観察. 耳喉 37 : 657~662, 1965.
- 4) 大沢博之 : 第Ⅷ X X I脳神経症状をきたした Hunt 症候群と思われた一症例. 耳喉 44 : 557~560, 1972.
- 5) 西村秀夫, 他 : 耳帯状疱疹出現後に脳幹障害をきたした症例. 耳喉 55 : 251~257, 1983.
- 6) 小野寿之, 他 : 帯状水痘ウイルスによる内耳障害に対するインターフェロン髄空内投与. 耳喉 57 : 621~628, 1985.
- 7) 杉山貴志子, 他 : ハント症候群に伴う急性感音難聴について. Audiology Japan 28 : 395~396, 1985.
- 8) 蓑和田寛子 : Hunt 症候群. 耳喉 42 : 69~77, 1971.
- 9) 阿部 隆 : Bell 麻痺及び Ramsay-Hunt 症候群の統計的観察. 日耳鼻 84 : 608~617, 1981.
- 10) 庄司浩史, 他 : ヘルペスウイルス感染症. 内科 53 : 425~427, 1984.
- 11) 平田賢三, 他 : 多発性脳神経症状を示した Hunt 症候群の1例. 耳喉 47 : 205~208, 1975.
- 12) 新井寧子, 他 : 抗ウイルス剤 Ara-A が奏効した脳幹症状を伴うハント症候群の1例. Equilibrium Res 44 : 204~210, 1985.

原稿採択 : 昭和61年4月21日 急載

別刷請求先 : 水田康雄

〒607 京都市山科区竹鼻四丁野町19の4

愛生会山科病院耳鼻咽喉科